

手紙のこと二つ

(一)

その日私は
私宛の手紙が書きたくなった。
ちよつぱり苦勞をしているので
慰さめてやりたくなくて……。
宛名を書くのに
はたと迷った。
様も殿もおかしからう。
様も殿もない私宛の手紙。
ポストに入れたら
ぽと——んと落下して行く手紙の重さが
いつまでもここに残った。

(二)

その手紙は
誰にも見せたくなかった。
だから本棚の奥にかくして

四十年が過ぎた。

四十年が一瞬だとは思わない

青春と言うものがあつた証しのように

ひとりの人がそこに住んでいた。

もうお互いに白髪だ

かくれて逢うこともあるまい

と決意した時

その手紙は

本棚の奥から消えていた。

(三)

手紙を書いたつて
届かない人もある。
読んでくれない人に

無精に手紙を書いてみたくなる時がある。

「レーニン素人の読み方」

読みかえてみる。

明日は差別、天皇制、日常生活を考える

会合で話をせねばならぬ。

老眼鏡の奥の眼がちかちかする。

少くとも

まだ私には手紙を出せる二人が居る。

二人はハレー彗星について西と東で書い
ている

生きているとはこうゆうことか

ふとそんな思いがこみあげる。

「中野重治を偲ぶ会」

原泉さんは

元気になって

その声に張りが出た。

今夜

二人に手紙を出してみる。

別に用事があるわけなし。

返事は来ないだろう。

いつかの私からの

私宛の手紙が届いた。

「立て！」と書いてある。

吉田欣一

夜の海から

梅田智江

1

森のなかを歩いていたらね。ちっちゃな遊園地があったの。わたしの知らない遊園地で、雪が降っていた。すべり台で遊んでね。暗くなるからおうちに帰ろうとするね。いつも遊んでる広場になってたの。「へんだなあ。夢みてるのかなあ」と思ったけど、わからなくなつて走つておうちに帰つて、ママと瑠衣ちゃんに「森の中の雪の降つてる遊園地に連れていってあげる。はやく、はやく」つて言つて、さんさんで広場へきたの。でも、森へ行くにはどうしたらいいか、わからなくて探したら、ママが「もういやっ」つて言つて、おうちに帰つちやつた。それで、瑠衣ちゃんだけ連れて、ふたりで森へ行く道、探したらお店がいっぱい並んでるところへ来ち

〈赤い鳥〉奇談

向井孝

1

ちよつと三日ばかり、留守して
ま夜中すぎに帰つてきた。
「うわあ、おいちゃん、これ、なに」
さきに立ったふう子さんが、〈サルートン〉の入口で、
声をあげる。
門灯をつけると、タタキに赤いペンキがとびちつて、足
もとまで――
「あつ、こどもや、おいちゃん」
玄関よこの壁に、ばあつとぶつつけたペンキのかたまり
が、
羽をひろげた赤い鳥のかたちになって
羽先きのしづくが、まだ動く。
「わるいこと、しよるなあ」
みまわすと、あたりはみんな、灯をけしたくらがりで、
誰かが、しいんと息をつまらせて、こちらを見ている気

やつたの。わたし、「ごめんね。ごめんね」つて、
瑠衣ちゃんにあやまつた。
かなしかつた。

2

ルイちゃんが「ゴキブリのたまご」つて、うれしそ
うに階段をトントンとあがつてきて、ソファに座つ
て、ストローの中へたまごを入れた。そしたら、そ
れがゴキブリになって、部屋中いっぱい、いっぱい
飛んだり、走つたりした。わたしは夢中でホウキで
たたいて、パパはエンピツでつぶして、ママは食堂
で何か飲んでたから持つてたコップでたたいたりつ
ぶしたりした。ルイちゃんはソファに顔をつけて、
「ごめんよう、ごめんよう」と泣いていた。どんど
んゴキブリが死んでいって、気がついたらゴキブリ
が人間になっていた。人間が部屋中ごろごろ、ころ
がっていて、よく見たら「のびた」や「すねお」や
「じゃいあん」みたいだった。それで、テレビにで
てくるときみたいに小さかつた。

3

青山くんが泣いていたの。泣いているのをみながら、

配。

2

S君が訪ねてきた。
「すぐ、ここ判つた？」
「ええ、壁に赤い鳥はりついているのが目印しや、と教え
てもろたんぞ」
それから急に改まつて
「そやけど、用心せなあきませんで」
「〇〇のU氏と、××のN氏のところにも、ついでにの
を、見ましてん」
「暴動とか地震とか、なにかコトがおこつたら、まず第
一番にヤルとこの目じるしや、云うてまつせ」
「ホンマかいな。ぼく〈アカ〉やのうて〈クロ〉やのに
…」
とは云つたものの、冗談ではすまへん。
さつそくふう子さんと、タワシでゴシゴシ、
が、セメントのデコボコ化粧壁、とても落ちるもんやな
い。
しゃーないから、そのまま。

3

ちよつと一ぱい〈カマ〉でのもんで、

わたし、トンネルの中へはいっていった。トンネルの中は暗くて、階段がいつぱいあって、あがつたりさがったりしてた。わたしもあがつたり、さがったり、ずんずん歩いたけど出口がわからないの。女の子は女の子の出口から出なくちゃいけないのに、男の子がいたずらして、わからなくしちゃったの。それで、胸がきゅつと苦しくなつて、声がでなくなつて、あんまりわからないから「もう、いいや」とおもつて、自分だけ運動場へでちゃつたの。そしてママが運動場の隅っこで、ひとり立って待っていた。わたしが声をだすと、ものすごい大きな声になつて、びんびん響くので、ママの方に走つていって小さな声で今のことを話した。ママも小さな声で「よかつたね。でてこられて」と言つて抱っこしてくれた。うれしかった。わたし重いのに、ママはとも軽そうに抱っこした。

4

学校でね。「あたまがいたい」と言つたら、姥先生が「やつぱりそうか」といつて、大きな黒いハサミで、頭の上の方をチョン、チョンつてふたつ、骨まで切つたの。痛くなかつたけど奈央ちゃん、こわくてかなしかつた。

ジンバブエ

野口清子

夕やみが木々のかたちをして　おりてくる
たちこめる　みどりの匂い
公園の森を歩いて帰る
一日の仕事の　からめとられた時間の
疲れがやわらいでゆく
私の唇が　ジンバブエ　と　つぶやいた
ジンバブエ　ジンバブエ　ジンバブエ
リズムカルな言葉に
体が軽くなる

根こそぎくさつた白人の国ローデシヤから
甦つた　黒人の国ジンバブエ
ながく　ながかつた

王様とドレイ
王様とドレイ

白人のための富と
黒人のためのピストルと棍棒

ながく　ながかつた日々
の　あつた　あつた
思いがけないほど　すばやく
きつぱりと、

旭町通りを、ぶらぶらのぼつてきた。
坂道に、新聞をひろげて坐り、
ペンキ缶を三つならべている。
「どこかでクスネてきた（売りもん）やな」と、どこからか

「おいちゃん」

エツ、とふりかえると

低くおさえた声。

「どや、買うとき！すぐいるやろ？」

帽子でかくれていた顔を、ひよいと上げて、

ニヤリと片眼をつぶつてみせた。

「な、あの手でいくんや。（アリババと四〇人の盗賊）の…手伝うたるよ」

それから大声で、パンと手をたたいて、

「よっしゃ。この地図もサービスして、たつた千円！」

ぱつとひろげた地図の先端が、ころころ転がって、

ぼくの足許から、エスカレーターのように、ずんずん、

伸びていく。

あわてて、それにとびのると、

「あつ、もう、ここは新世界の市場通り…」

4

走馬灯みたいに、うしろへ走つていく町並。

「ほら、な、ここが関経連のH。徴兵制がいる言うた奴や。大拘の悪看守長Kのところはこれ。関電労組のダラ幹Sと、Sの親分M議員とも、ちゃんと印しつたある。」

もちろん、町内会の小ボス連中まで、軒なみ片つぱしか

らや」

ペンキ缶に、ハケをつっこむたびに、

赤い鳥が飛び立って、

両側の門柱や壁に、ぱつ、とはりつく。

「これだけ印しつけないと、あいつら眼エしろくろさ

せよるで」

「ほれ、もう地図一めん、赤い鳥がいつぱい…」

「もうエエやる。…」

ふつと、肩のうしろをふりかえると、

いつのまにか、もう、ぼくひとり、

阿倍野橋を行きかう人波にもまれながら

空のペンキ缶を、右手にぶらさげて佇つていて、

とたんに、どこか近くで

しきりにふう子さんの呼び声が、きこえてくる。

「おいちゃん…どうしてるの、

むかえにきたんよ、おいちゃん」

「ああ、夕日の通天閣が、きれいや」

ただ廃墟と泥濘と

悪疫と死のみ

—BURMAの旅から

長谷川七郎

ある時ふつと

入国検査がきびしく
行列の後から
通関のカウンターをのぞくと
要注意の日本人名が　びっしりならんでいる
手荷物の下着類を
一枚いちまいめくられたオンナの
所在なげにそらした目とはじめてあった
ずつと以前　ヨーロッパに渡る途次に憩つた
同じ吹き抜けのロビーで
追憶の思い入れの前を
手続きをすませたオンナが
かるい会釈をして去つた
僻地をまわる旅で
乗物と宿舎が揃あつた
高原の町や村
とぼしい食糧や雑貨を商なう店さき
山の中の手機織りや煙草をまく家内工場で

ふつと気をひかれる
浅ぐるいが　ふくよかで
おだやかにわらうムスメたちが
オンナの顔に重なつた

山岳民族を訪ねあるいた山道で
アンペラに組む竹を刈っている部落民の
山刀で削がれた切口が

ふしぎと中空でなく　木のように肉がつまっている
その時の戸まどいがよみがえつた
言葉が通じないほかに
わずか違う気がする
思いだせない　ほんのすこしが
寝ざめの夢をたどる　もどかしさで
いつまでも　つきまどつた

バコダの誘

赤茶けた円錐に白塗りの方形の窟院も交ぎっている
見わたすかぎりの廃都の荒野に
朽ちた仏塔が無数に散らばっている
小舟が通ると蝙蝠傘の影がゆれる
ひっそりと静まった水路の昼下り
むらさきの花房が垂れ下つた軒下を
ゆつくりと葬列が動く
楽の音を追つた部落のはずれ

天蓋を差しかけられた馬の背で
さらびやかに装つた稚児の回礼が練りあるく

シャワーを浴びている部屋に
間違つてとびこんだオンナが
見開いた目を伏せる
詫の言葉もいわずに走り去つた

腰布をまとい　黒ずんだ頬に銃創のある支配人が
得度と葬礼に行きあつた幸運を祝して　強い地酒をすすめた
戦争ばなしに興ずるヴェランダで
背を見せたオンナの華やいだ声がながれた

暗やみの向こう岸
仏塔の輪郭をなぞつた電飾が点滅し
そよ風がとぎれとぎれに川の匂をはこんだ
整石を踏み　バンガローをたどるオンナの
かすかな登音と気配をうしろできいた

供華

雨季には泥水が渦巻く並木道も
醋の木の枝が　迫持になつて日をさえぎつた
暗い杜にかこまれた部落をいくつかすぎ
上り勾配がつきたころ
傾きかけた日の下に
仏塔の散らばる丘がひらけた

爆破された鉄橋が目交に迫り
誰何する武装した兵士が
行く先の危険を告げた

赤い日が荒野の地平に沈み
裸足の爪先でさぐり歩く石だたみを
仲見世から釣鐘塔の裾をまわつたとき
オンナが行く手をさえぎつた
迎え火をかこむ癩疾の群から
まっすぐに立ちのぼる煙が
末香くさく　あたりをたち籠めた

暗い切り通しを手さぐりで
底なしに沈むという川岸をたどり
満月にちかいうす明かりに
オンナが供華をながし
郷里に持ち帰る水をすくつた

早立ちの前夜
守宮の張りついた
染のある壁の下
酒をすごしたオンナの
暗くかげつた　狂気の目が放たれ
免罪符をかざした手が
乾いた肋骨のきしむ　オトコの不覚を
ゆつくり握つた

気球

木原 実

鉄砲玉の数ほど

死ぬことはないんだ
野戦でうそぶいていた男も死んだ。

正月、一緒に酒を呑み
二月、寒鮒の乗っこみをやり
殺生はもうやめると
いつてきた男も死んだ。

人の数ほどの死はあるといえ
矢玉尽きて
生き残って
喜びもした男たちの
つぎつぎ死にきそい
この春が過ぎた。

「おだやかな顔で」
といったとき

うらみをとどめた頬骨が
白布の下にあった。
久しく会わない友であった。

別の一人は

戦後を登山に凝り
高くもない崖から転げ落ち
後遺症にうめきながら死んだ。

通夜は賑やかにと言葉をのこしたが
祭壇の見なれた禿頭に
雨の音がやまなかった。

朝はやくしらせをうけたもう一人は
小粋な洒落者で

会えば一山あてた話ばかり
弱兵で、苦勞もした男は
深い眠りの底にいた。

「起しちゃいけませんよ」
かみさんが背後で気散じをいった。

十日おき

通夜にゆき
火葬場にいった。

戦争では死ななかつた男たちが
伍を組んで死に競う慌しさは
作戦のあとの屍体受領とまるでおなじ。

一つ一つ死顔をたしかめ
たしかめたあとの
にわかにひろがる距離感におのき
交替で屍体を担いだ。

死んだやつらは
骨となつても隊伍をつくり

ぼくらの前を通つていった。

撃ちこまれる弾の数ほど
たしかに死にはしなかつた勘定のうち側で
ぼくらは肩を寄せ
不条理のおもいに耐えた。

死んでいった戦友の
沈黙のおかげで
ぼくらの生きた道には

たのしいことの想い出しかない。
われがちに
てんでんに

戦後を長く生きて
またわれがちに

死んで、この春の隊列をつくる。
畳の上で死ぬことばかり語って
それぞれに願ひ通り死んだのに
伍を組んで

ぼくの前を過ぎてゆくのはなぜだ。

桃の花芽に

雪まじりの雨がしぶく庭で
ぼつてりと咲いた桜の下で

何べんも安息の経が誂まれた。

重い棺が担がれるたび
ぼくは退いて道を譲った。
ぼくらはしよせん
屍を楯に生きたのびてきたのだ。
草の根方に

撃ちこまれる弾ぶすまを
そうしてよけてきたように。

ゴールデンウィークの空に
今日は珍らしい気球が浮かんで
赤と白のんだら縞が

日に映えて流れてゆくのを
ぼくがみている。

さかしらに生きたのびたやつらが
道に吊るされて
長い戦後の終りがある。

■埋草 秋山さんの奥さんが病気で、四月の初めから独り暮らしときいて、激励に伺いましようかなどと冗談をいつていたのが実現した。五月十六日夜、新宿末広亭近くのモツサンで女ばかり(男もチラホラ)の励ます会をやった。歌ってしゃべって、久方ぶりの秋山さんの磯節に酔った。夜更けて秋山さんの家に行ったら、階段の突きあたりに天文同好会からの賞状が貼ってあった。貴殿はハレー彗星宣伝に貢献したから表彰する、ついでにゲンノショウコ2袋を贈るから健康で二度目のハレー彗星を見るべしというのである。S

後記

○ぼくの立場からコスモスを振りかえると、本原実が本号に書いた詩「気球」のように死屍、いのいの思いがある。そして人が死ぬということがいとも簡単に当然な出来ごとのようでもあり、とりかえしのつかぬことの中に押し込められつづけているみたいな気にもなる。しかしぼくはそんな弱気ではない。それだけに死んだ友人たちから追いまわされて、時間が今日も明日も足りない思いもある。○五月二四日に植村諦の小集会があった。彼の遺言による詩集『鎮魂歌』の出来たのを機

会に。その死から二十一年すぎて、集まる人も年をとっていた。コスモスでは同人の死には大小の特集をやつて来たが、植村のときは休刊中になにも誌上に反映するものがなかつた。今度の刊行と集会では、それにかかわつたぼくとしてはそのことも思いの中にあつた。今度の詩集に依つて「植村諦」を誰かかいてくれたらと願つている。「鎮魂歌」は、その詩人論の対象となるようにもいく分考えられた編集でもあつた。○68号は少しおくれたが、次の号は既定のように進められる筈である。次号は増頁の必要もあるかと心配しているだけに、メ切を守つて欲しい。(A)

コスモス 第29号 (通巻68号)

▲定価五〇〇円 T二二〇円V

発行 一九八〇年六月一〇日

編集人 秋山 清

発行所 東京都中野区上鷲宮五二一八八

コスモス社

電話 03 九九八一 二九二五

印刷(資) オカダ印刷

名古屋昭和区長戸町四二二〇